

筑波大学社会・国際学群「国際文化論」（2年生以上）授業実践報告

早川, 公
大阪国際大学経営経済学部 : 准教授

<https://hdl.handle.net/2324/4822588>

出版情報 : オンライン授業の地平 : 2020年度の実践報告, pp.86-86, 2021-04-30. 雷音学術出版
バージョン :
権利関係 : Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives International



1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本授業は、文化人類学的な視座に立ち、グローバリゼーションとそれに伴う社会変化を理解するための視点および知識を修得することを目的とした。具体的には、前半でデヴィッド・グレーバー『ブルシット・ジョブ』を読解し(教科書指定はせず)、後半はアナーキズムの議論を参照した現代社会の考察をおこなった。

本授業は、もともと集中講義(75 分×4 コマ×5 日)で 2021 年 2 月開講予定であった。当初は学外探索も想定していたが、大学から 8 月に受け取った「秋以降も原則オンライン開講」という方針に基づき、オンデマンドかリアルタイムかの選択に迫られた。当該大学は LMS が manaba、リアルタイム形式の場合は Microsoft Teams であり、本務校の環境と異なったため、対応しやすさの観点から manaba に動画・資料を上げるオンデマンド形式を採用した。授業の出席は、各回のワークを Google フォームで提出することによって判定し、提出期限は最終日までと余裕をもたせた。そして評価割合は、課題提出状況 40%、課題内容の量と質 30%、最終レポート 30%とした。なお最終レポートは第 1 回にテーマを示し、授業のワークと連動していることを明示した。

授業解説動画は、Zoom で収録したものを YouTube にアップロードし、受講生には URL を LMS 上で周知した。また、スポットで YouTube Live を実施した授業回もあった(後述)。

各回の授業の構成は、①授業の論点とワーク内容を示した動画、②文献解説動画、③動画や配布資料に基づくワークの時間、の 3 つに分割した。そして、集中講義であることを鑑み、受講生が持続的に受講できるように設計した。例えば、一日の開始コマでは「アイスブレイクセッション」と題して、学習方法や発想法のワークを 20 分程度組み込んだ。さらに、学生が提出した課題のフィードバックを YouTube Live でラジオのお便りを読むように質疑応答する「コール&レスポンス」の授業回も一日に一度挟んで進めた。

また、今回の授業実施にあたって最も気を配ったのが画面構成である。2020 年度の試行錯誤と他大学

教員の実践例を参考に、映像スイッチャーの Atem Mini および付属のソフトウェアを用いて、(a)PC、(b)外付カメラ、(c)iPad Pro を接続し、(b)で教員を映しながら(c)の PowerPoint の授業資料を画面に挿入し、タッチペンで書き込みながら解説した。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

学生からのコメントを読む限り、上記の授業の意図は十分に伝わり、非常に手応えを感じた。例えば、画面構成の工夫については「パワポの画面を 90 分眺める授業より身近に感じられた」との意見が寄せられた。また最終回の振り返りで収集した「授業で最も印象に残ったこと」では、「アイスブレイクセッション」のワークを「新鮮だった」「学習の意欲が湧いた」と指摘する学生も多く見られた。そして最も反応が良かったのが「コール&レスポンス」である。「授業の疑問を解消して次の回に進めた」「他の学生のコメントをみて刺激を受けた」「課題に追われる中でリズムが作れた」といった点が学生から高評価であった。他方で、執筆者も学生が学ぶ喜びを綴るコメントに大いに触発された。オンデマンドにおける学びの双方向性は、これからの遠隔授業を考える上で大切にすべきことであると考ええる。